

志賀原子力発電所2号炉 敷地周辺の地質・地質構造について

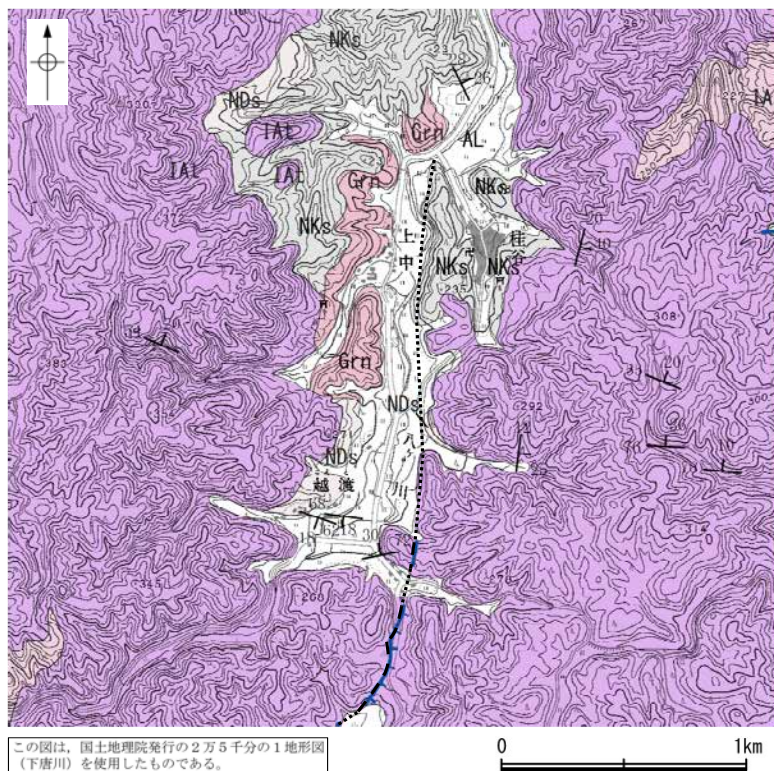
敷地周辺(陸域)の断層の評価
修正分(P.143, 157, 158, 344, 補足資料P.2.6-7-12)

2023年12月1日
北陸電力株式会社

2023年11月21日提出資料からの修正分

【富来川断層北方の地質分布の見直し(1/2)】

- ・富来川断層の北方において、追加の地表踏査を行い、穴水町上中付近の八ヶ川の東岸において、従来は大角間層の分布域としていたエリアで花崗岩が分布すること等を確認した。
- ・この結果を踏まえ、設置変更許可申請(2014年8月)から地質分布を変更した。



地質図(見直し前)

地質分布を見直し

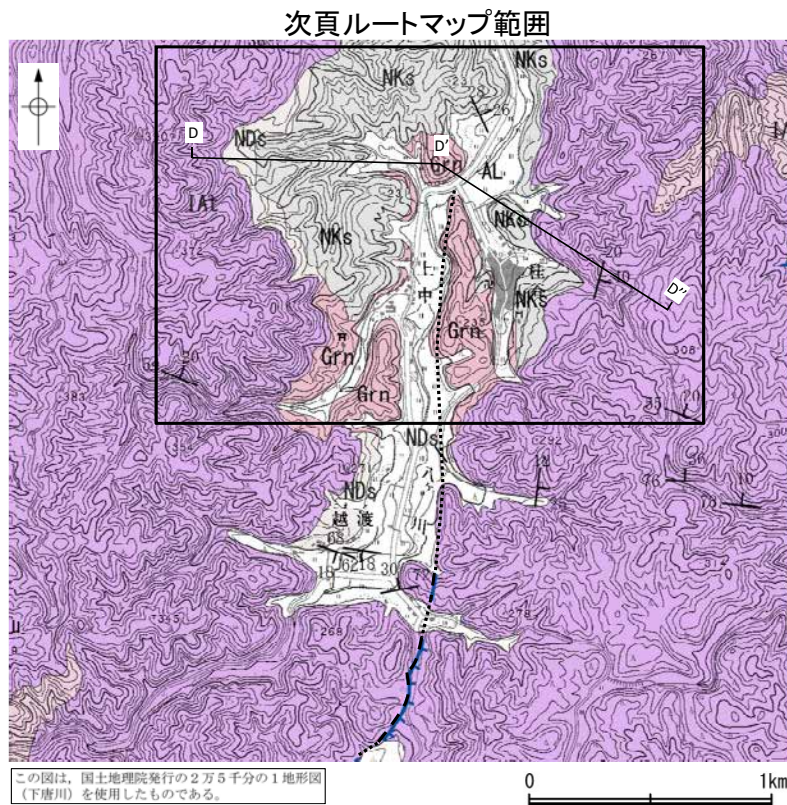


【地質】		地層・岩石名
地質時代	数地層の番号	
完新世	AL	沖積層
第四紀		
中新世	IAa	別所岳安山岩類 安山岩
第三紀	IAat	別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)
古第三紀	NKd	デイサイト・溶結凝灰岩
	NKs	大角間層
	NDs	大福寺砂岩層
先第三紀	Grn	花崗岩・片麻岩

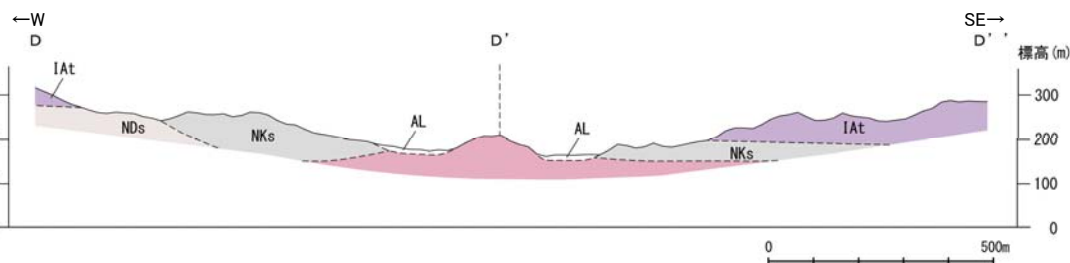
	地層の走向・傾斜
	節理の走向・傾斜
	地質断面線

【リニアメント・変動地形】
 Ld (変動地形である可能性は非常に低い)
 ← ケバは低下側を示す。

--- 断層位置
 } 推定区間



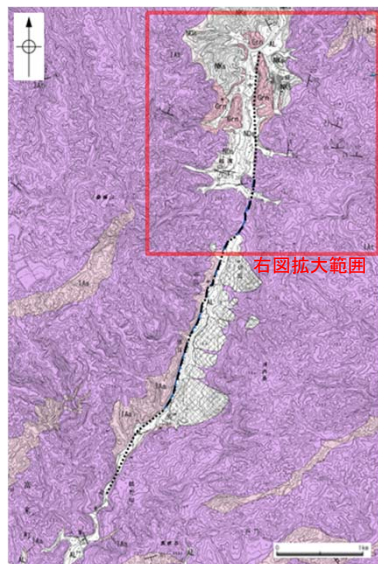
地質図(見直し後)



地質断面図(見直し後)

2.6.4 (8) 富来川断層の端部 — 北端付近の地質調査 —

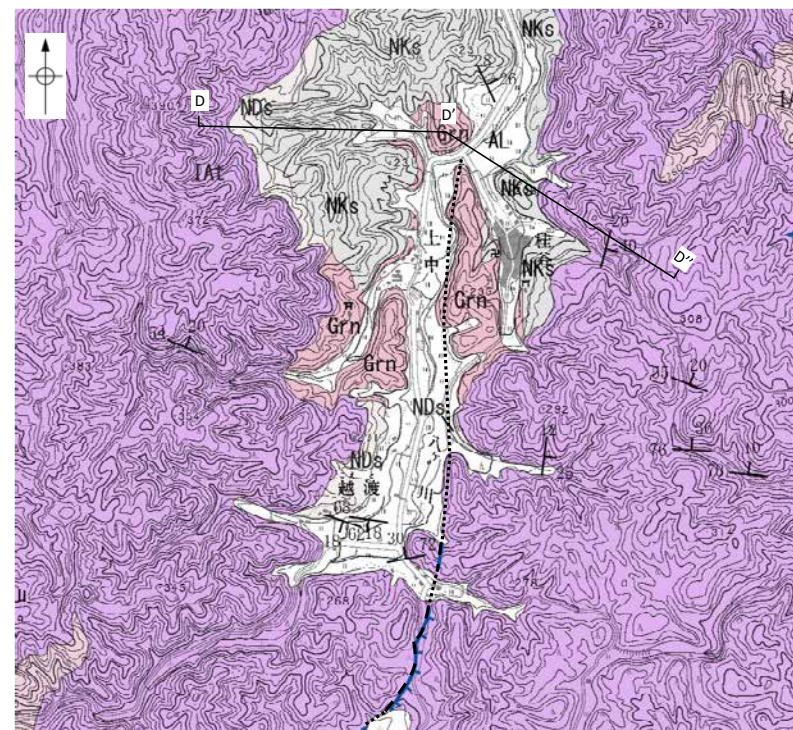
○地表踏査の結果、リニアメント・変動地形の北方において、富来川断層に対応する断層は認められない。
 ○また、穴水町上中周辺において、先第三系の花崗岩・片麻岩が八ヶ川谷底の両岸に分布し、断層が推定される位置を挟んで系統的な地質分布の変化は認められないことから、八ヶ川西岸を隆起させるような断層の存在は示唆されない。



地質図

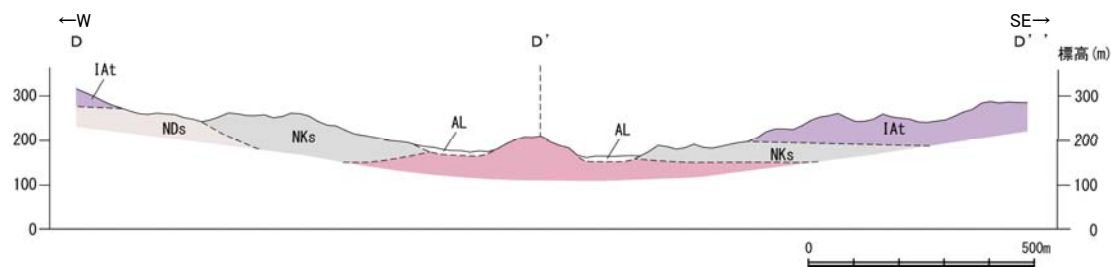


----- 断層位置
 推定区間



この図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(下唐川)を使用したものである。

地質図(見直し後)

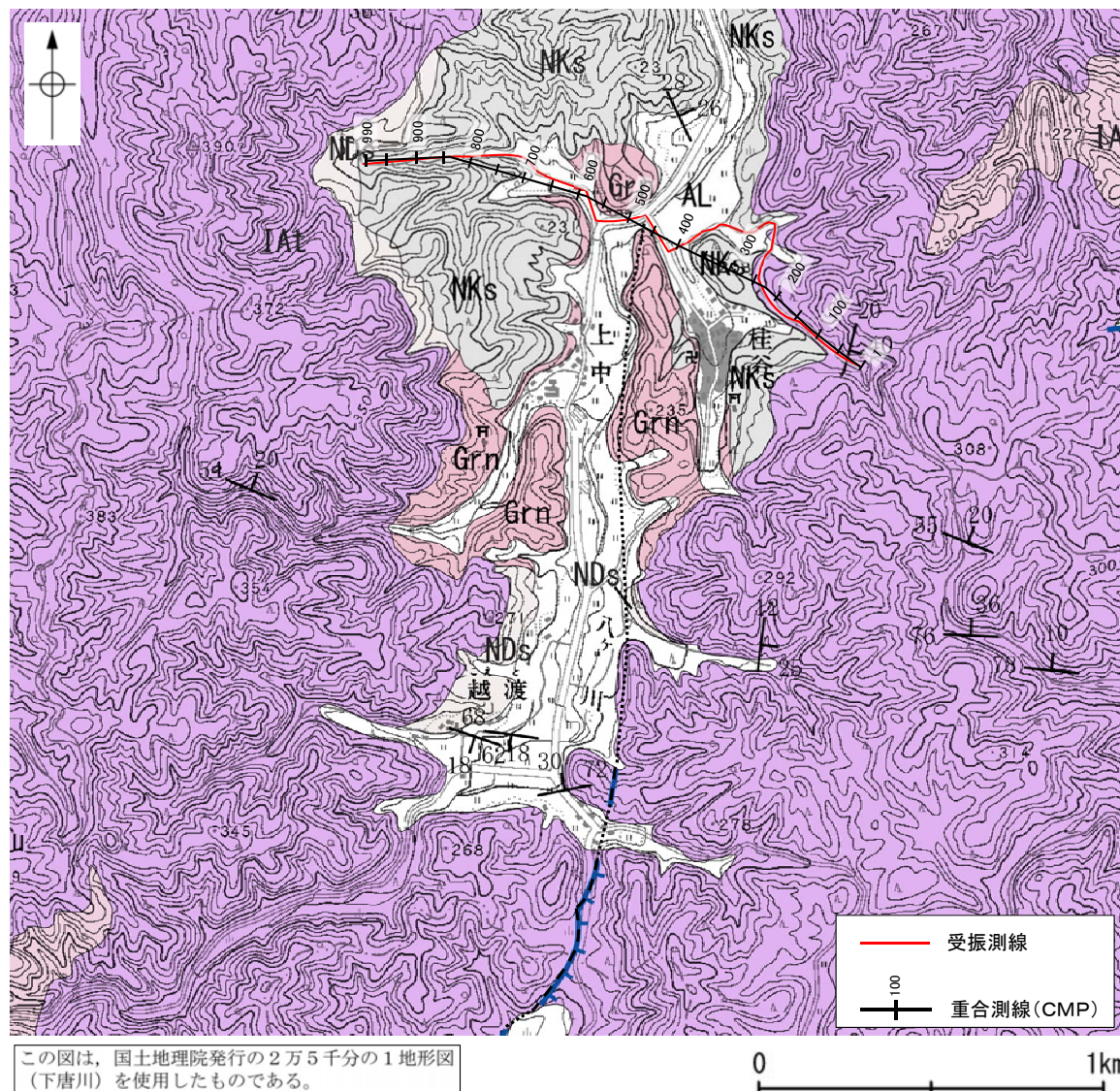
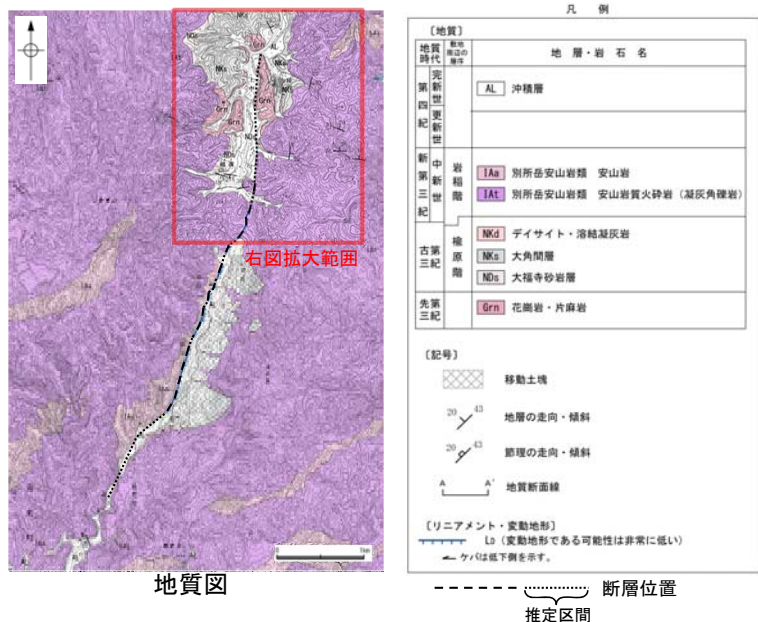


地質断面図

2.6.4 (8) 富来川断層の端部 —北端付近の反射法地震探査—

コメントNo.26の回答

- リニアメント・変動地形の北方において、反射法地震探査(富来川北方測線)を実施した。
- 調査の結果、リニアメント・変動地形の延長部付近において、富来川断層の存在を示すような地表付近から深部へ連続する系統的な反射面の不連続等は認められない。
- また、深度断面からは、富来川断層の延長部を挟み、地層境界に明瞭な高度差は認められない。

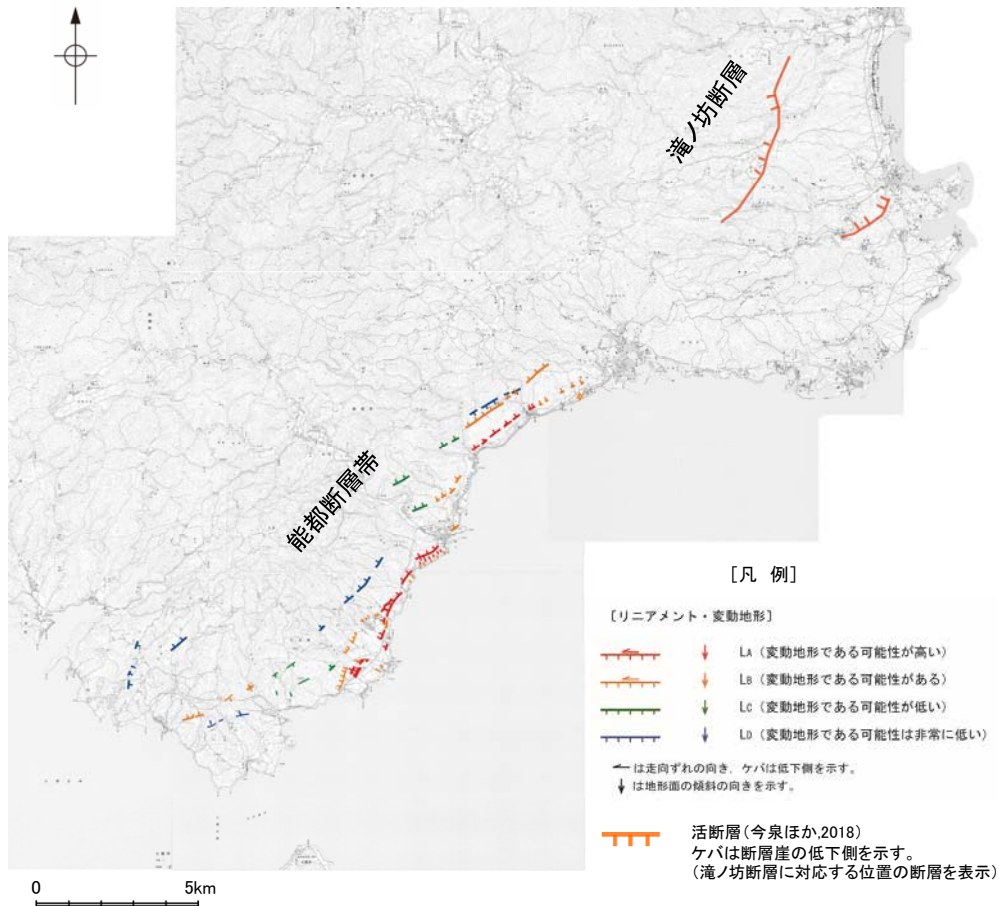


富来川北方測線 仕様	
測線長	1.9km
振源	中型バイブレータ1台(スイープ数標準3回, スイープ周波数10~200Hz, スイープ長15s)
発振点間隔	3.125m
受振器	上下動速度計(SG-5, 固有周波数5Hz, 1個組)
受振点間隔	3.125m
記録系	有線型記録システム(Secrel 428)
サンプリング間隔	0.5ms
記録長	2s
解析CMP間隔	1.5625m

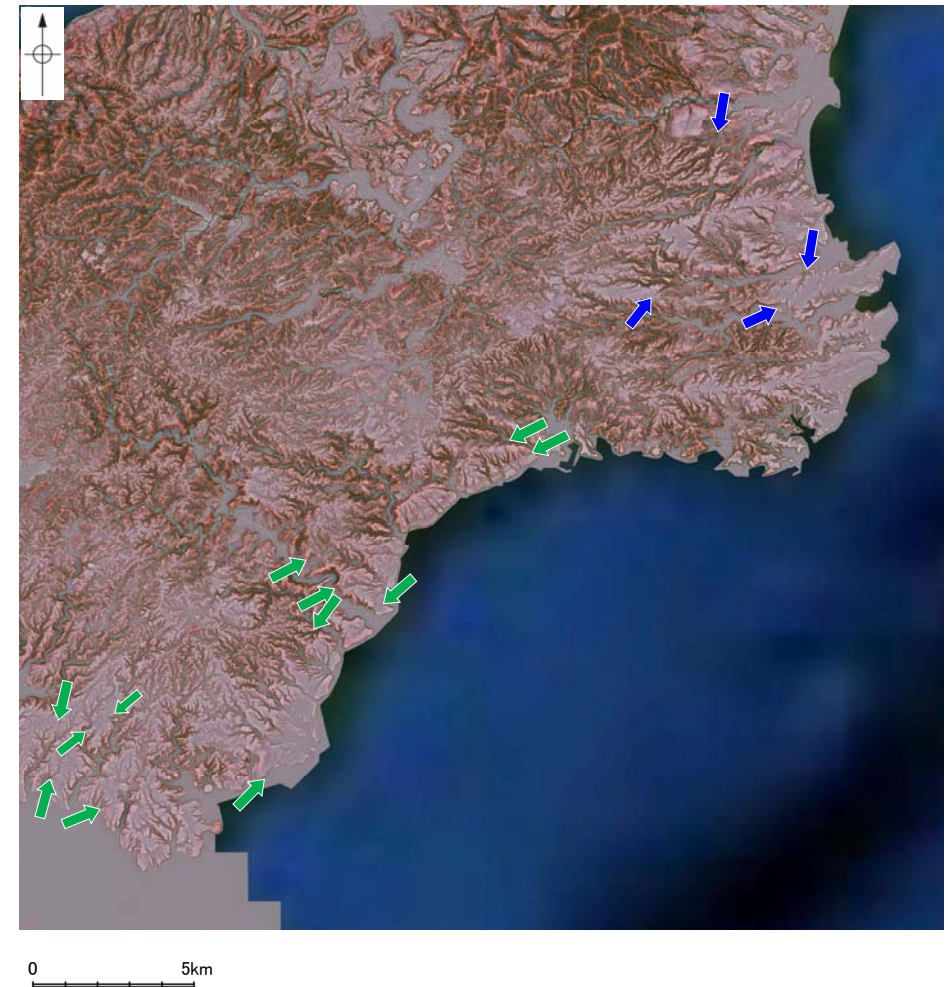
・垂直分解能は、反射波の卓越周波数に基づき深度200m付近で24m程度

3.2.17(3) 能都断層帯と滝ノ坊断層の連動の検討結果 ー文献調査(地形調査, 今泉ほか(2018)), 地形調査ー

- 能都断層帯と滝ノ坊断層について, 地形調査を行った。
- 空中写真判読の結果, 能都断層帯は丘陵地内に急崖等が認められる南東側隆起の断層帯である。
- また, 滝ノ坊断層は, 今泉ほか(2018)によれば, 丘陵地内に逆引き低断層崖として認められる南東側隆起の逆断層である。



リニアメント・変動地形分布図



赤色立体地図
(航空レーザー計測データ計測データにより作成)

- ← リニアメント・変動地形(能都断層帯)
- ← 滝ノ坊断層(今泉ほか, 2018)

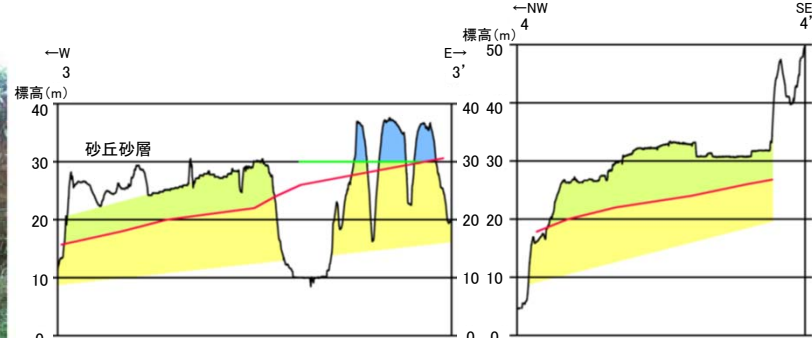
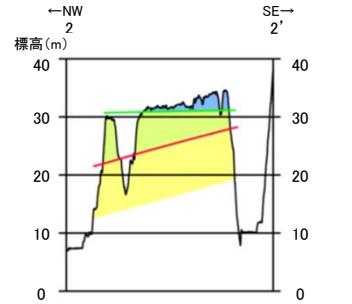
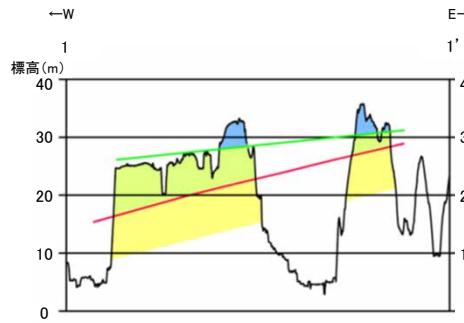
【地表踏査結果 - 宿女から滝谷町 -】

○宿女から滝谷町付近において、中位段丘 I 面の山側に中位段丘 I 面よりやや高度が高く凹凸のある地形が判読されたエリアを含めて地表地質踏査を行い、古砂丘砂層と中位段丘 I 面堆積層の境界及び中位段丘 I 面堆積層と赤浦砂岩層等の基盤岩との境界について検討した。その結果、いずれの境界も海側(西側)へ向かって緩く傾斜し、調査地域内に連続して分布することを確認しており、断層活動による変位・変形は認められない。

○よって、地質調査結果を踏まえると、活断層研究会(1991)が記載した高浜断層の南東側における海成段丘M1面の隆起は、中位段丘 I 面を覆う古砂丘を判読したことによるものと考えられる。

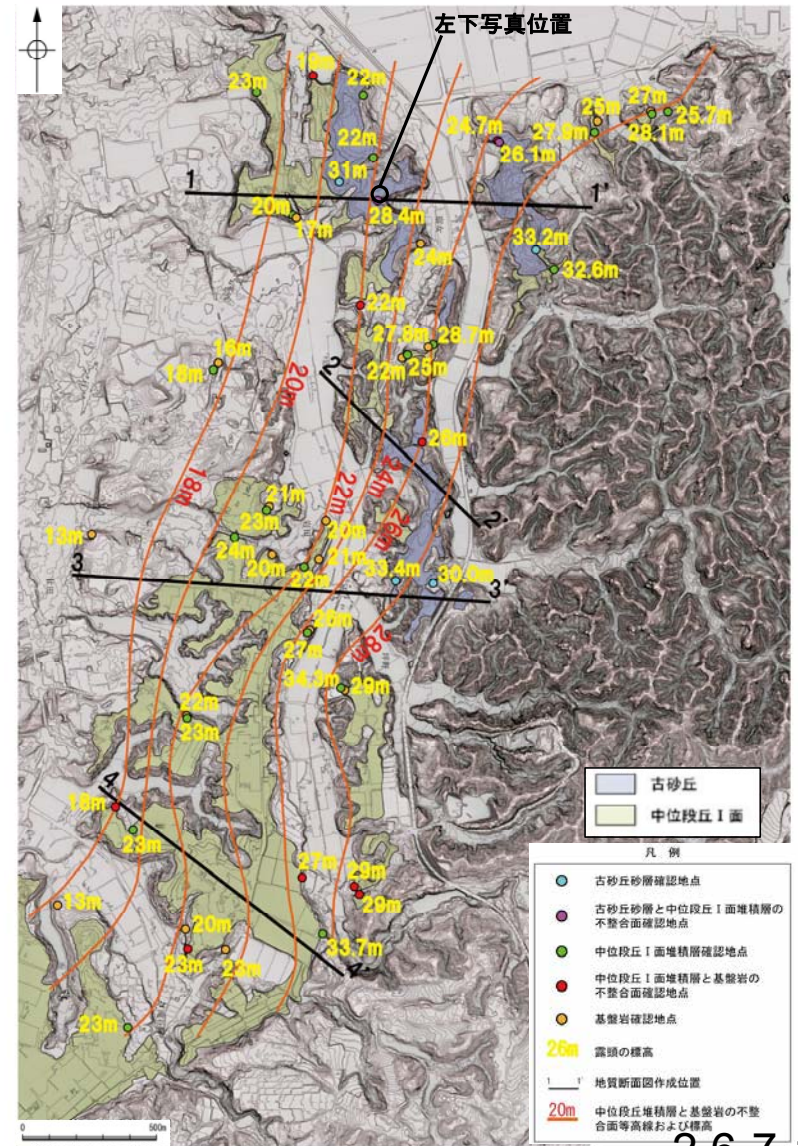
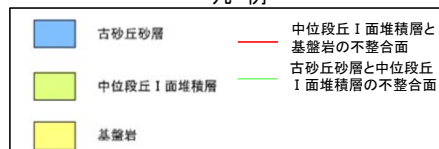


位置図



地質断面図(H:V=1:25)

凡例



露頭分布図



古砂丘砂層と中位段丘 I 面堆積層の境界